伊丹公022903　3面　尚❶藤❷井❸奥❹井❺井❻藤❼藤

# 男女共同参画センター「ここいろ」4月オープン！

## 伊丹商工プラザ5階で相談事業や啓発事業

市立男女共同参画センター「ここいろ」＝写真＝が今年4月1日、宮ノ前の伊丹商工プラザ5階にオープンする。

「ここいろ」という愛称は、全国の応募者291人の中から選ばれた。「一人ひとりが自分の色を彩ることのできる施設」を掲げ、女性だけでなく多様な市民が、学びや交流から自分らしく生きられる社会づくりを目指す。

性別による困難や生きづらさを抱えた方を支援するため、女性のためのカウンセリング・法律相談・チャレンジ、女性・男性の悩み相談、セクシュアルマイノリティ相談などを実施する。

また、ハローワークと連携した女性の就業支援相談や、男性を対象とした講座やワークショップを実施。図書や情報誌が閲覧できるコーナーなども設置する。

4月4日（土）は午後0時半からオープニングセレモニー。

午後2時からは大正大准教授、田中俊之さんによる講演会「『女もつらいよ男もつらいよ』～男性学の視点から性別にとらわれない多様な生き方を考える」を開催する。

市民自治部共生推進室の田中裕子主幹は「相談や講座だけでなく、フリースペースや貸室もある。性別に関わらず多様な方に気軽に利用してほしい」と話している。

様々な人が輝くための新たな拠点として今後が期待される。

（丸　晴子）

現代人物　風景

## 趣味も活かしイベントで地域貢献

写真協力＝西田写真館

吹奏楽、鉄道、漫画…。多彩な趣味を持つ堺さんの本職は「伊丹桜ケ丘郵便局長」。ことば蔵や昆虫館との合同イベント、三軒寺前広場で毎月開かれる朝マルシェへの参加などに積極的に取り組んだり、伊丹の風景が載った切手を発行したりして、「地域に密着した郵便局」を実践している。

伊丹桜ケ丘郵便局は堺さんの祖父が昭和37年（1962）に開局。二代目の叔父が定年で局長を退くことになったため、堺さんが製薬会社のサラリーマンを辞め、局長採用試験を受けて平成9年（1997）三代目を継いだ。

郵便局が展開する文通のPFC（ペンフレンドクラブ）アドバイザーの資格を持ち、小中学校で手紙の書き方の講師を務めている。また「絵封筒プロモーター」という肩書きを名乗り、趣味と仕事を兼ねて、封筒に絵を描いて大切な人へ送る絵封筒のイベントも開催。大学生の時、漫画サークルで一コマ漫画や四コマ漫画を描いた経験が活きた。

さらに、自ら取材・執筆する「桜ケ丘つうしん」という新聞を毎月1回発行している。

「地域の郵便局は気軽に入れる金融機関。何かおもしろい話があるかもしれないので、世間話をしに来るような感覚で利用してもらいたい。そのため郵便局自体も地域に密着した活動を今後も繰り広げていきたい」と堺さんは話す。その一環としてこの郵便局では、偶数月の15日、年金の支払日に、鳥取産の野菜や魚貝類を販売し大変好評だという。

伊丹桜ケ丘郵便局を訪れてみれば、新しい何かを発見できるかもしれない。

（細尾　哲也）

※写真で着用している帽子とかばんはイベント用であり、正規に業務中に着用しているものではありません。

伊丹桜ケ丘郵便局長
**堺洋之さん(52)**

## 老舗探訪

### しまもと昆布

伊丹市美鈴町2-71-4
☎072-781-1373

佃煮を中心にした昆布製品を伊丹で50年以上作り続けている。

店があるのは美鈴町。紺色の暖簾（のれん）をくぐって中に入ると、甘い香りが漂い、和やかな雰囲気。気さくでおしゃべり好きな店主の嶋本正治さん（80）＝写真上＝が27歳になった昭和41年（1966年）、伊丹で創業した。加工から卸し、販売まで手がける。

取り扱う商品は約50種。昆布を醤油や砂糖などで煮詰めて一つ一つていねいに作られている。朝9時から仕込みを始め、釜炊き、冷却、裁断の工程を経て製品ができ上がる。塩昆布は、それに乾燥と味付けの工程が加わる。客のニーズに合わせて味を決める姿勢で、顧客を広げて来た。

冬の売れ筋は進物関係で、新製品の「ゆずしづく」（90グラム、税込490円）がお勧め。香り高いユズ皮がアクセントになった昆布ふりかけだ。

「消費が振るわない昨今ですが、これからも上等でよい品物をきっちり作り、味で勝負していきます」と嶋本さんは張り切っている。

店内には約50種の商品が並ぶ

「よろこんぶ」と言われる縁起物の昆布をこれからも作り続け、庶民の舌を喜ばせ続けてほしい。

（原口　一哉）

郷土土産品紹介

## 数量限定!!人気の『たみまるほしいも』

伊丹特産の「たみまるほしいも」が、毎年2月から4月までの期間限定で販売されている。

本市マスコットキャラクターの名を冠した、この商品の原料は、「紅はるか」というサツマイモ。黄金色で甘みがあり、グミのような食感が特徴だ。昨年は、グルメ甲子園でグランプリを獲得。数量限定で入荷するも、すぐに完売する人気商品だ。

製造・販売元は伊丹の東野、大野地区の苗木農家で平成26年（2014）に創設した「伊丹サツマイモ研究会」。盆栽梅と南京桃が特産品だった両地区では、平成24年のウメ輪紋（りんもん）ウイルス禍の影響で梅や桃の生産が行えなくなり、連作障害を防ぐため、裏作で栽培していたサツマイモに着目。同会の阪上芳孝会長（55）は、焼かずにそのまま食べられ、小さな子どもにも安心して与えられるようにと、干し芋作りに乗り出した。無添加・無着色にこだわり、芋の品種も数種類の中から試作して選んだそうだ。福祉との連携により、障がい者施設「協同の苑さつきくすのき」に作業を依頼している。

『たみまるほしいも』は、北本町のスマイル阪神で販売。一袋（150グラム）400円（税抜）。

形は不ぞろいだが、味や品質は全く一緒の増量パック「ほしいも」（200グラム）400円（税抜）もおすすめだ。『たみまるほしいも』は毎週土曜日に100袋入荷。なくなり次第終了。

農産物直売所「スマイル阪神」
☎072・783・6977

（龍田　起代子）